

2011

パキスタン カラコルム 記

6/17~7/7

海老原 道夫

前回 2009 年のヒマラヤ行きは、本当の所、バルトロ・コンコルディアに行きたかったのだが、資金不足で残念ながらナンガバルバット周辺のトレッキングで締めざるを得ない事となったのだが今回は何とかかなりそうなので、いつもの通り半年位前から周囲に「行くぞ」「行くぞ」と言いまくっていると何とか認められて来たようなのでついに実行した。

前回は6月1日出発で行動したのだったが、残雪が多く大分行動に制約を受けたので、今回は6月17日発と言うことにしたが、残念ながらコンコルディアに登りつく頃に雨期に入るタイミングとなってしまった。

ガイドは前回と同じく「シャー」だったので、下山後他のガイドは「シャー」と組むと降られるから、今度は俺と、と売り込んだが多分無いと思うし、もう歳だし、資金も無理だろうな。

とにかく6月17日発のPIAでいつもの通り1人で出発した。翌6月18日、スカルドへの国内便は、飛びそうなので私の搭乗手続きを終らせたが、ガイドのシャー分のチケットが取れない。この国の予約の仕組みがよく解らないが、とにかく外国からの予約が優先するらしい。

仕方なく、私だけが飛行便で、シャーは陸路をとる事としたが、私としてはシャーの大きい方の荷を預かり、スカルドまで1人旅をする事になった。所で私はシャーの荷物を預かるなんて思っていなかったので、その形も色もあまり良く覚えていないので、ターンテーブルからうまくおろす自信が全然ないし、イスラマバードから出る国内線は何本もあり、おまけにこの国の決して親切とは言えない案内で、スカルド行きの便をキャッチするのは、ずいぶん眼の色を変えていなければならない。案内板は出発時間を過ぎてても何の変化もないし、入り口のカウンターに居る案内係もロクな返事をしない事3時間、「今日のフライトはキャンセル」だと。またこれだ。さあ私はどうすれば良いのだ。取り合えず公衆電話を見つけてナジール事務所に電話して、シャーとの連絡をつ

けてもらって合流しなければ、ニッチもサッチも行かない。この国でガイドとバラバラになったのは今日が初めてなので全く困った。初めから1人なら別に困らないが、合流しなければならいとなれば全くやっかいだ。

ジタバタしたあげくシャーは未だゲートの外で、機が飛びまですべて待っていたので何とか合流する事が出来た。そしてその日はホテルに戻って翌日もう一度飛行便へチャレンジだ。何と無駄に労れた一日だったのだ。

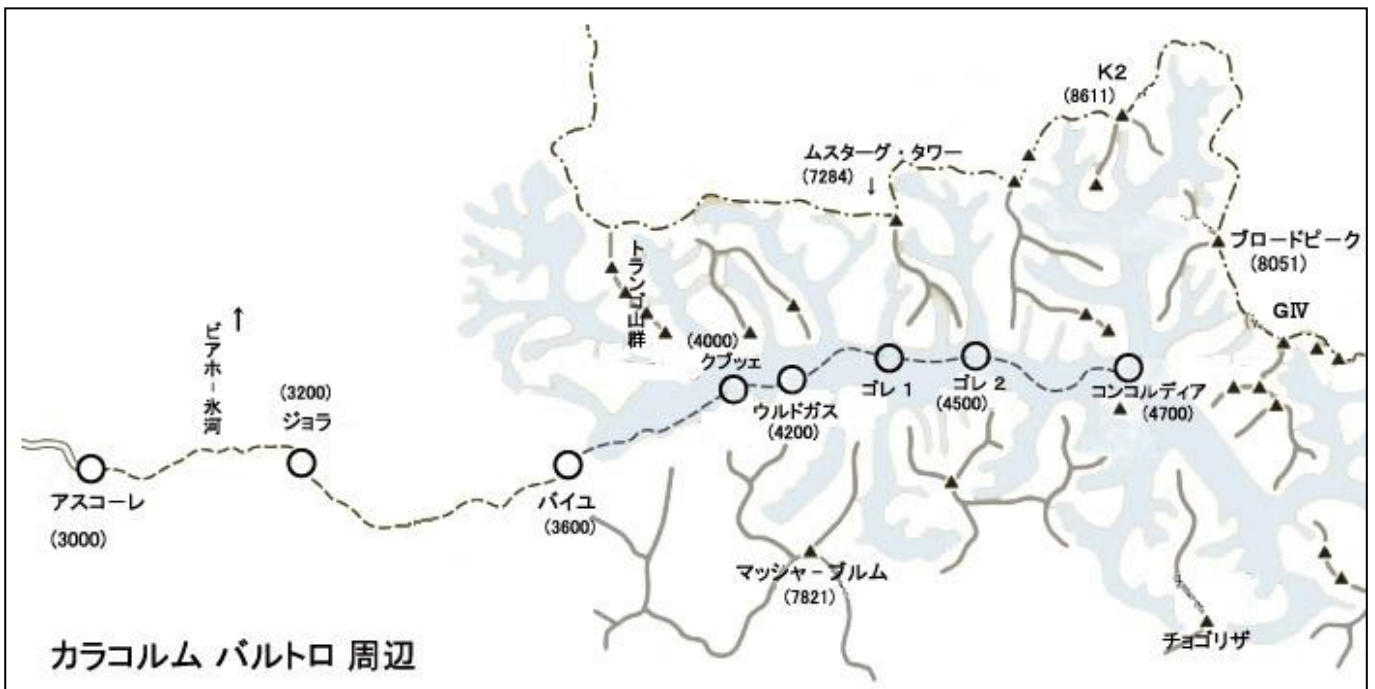
翌18日はスカルド便は遅れながらも飛んだのだがシャーのチケットは相変わらず取れず、私も前日のドタバタに懲りて自分だけ別行動するのはやめて、シャーと共に陸路をとる事にしたが、同行のアメリカの青年が無事に飛び立つのを確認してからの事なのでスタートは午後過ぎになってしまった。

それから2日間 例のカラコルムハイウエーと呼ぶ超デコボコ道を激走し、スカルドへ着いたのは20日の夜10時過ぎとなった。

6月21日（5日目）アスコレへ

さっさとアスコレへ向かいたい所なのだが、今回の目的地は中国・インドとの国境に接近する位置なので、軍のチェックを受けなければならず、シャーは朝からその書類作りでナジール事務所のスカルド出張所（それが有るのを私はしなかったが）と打合せたり大変だったようだ。私も出張所に行ったり、軍の事務所に行ったりして、結局アスコレへのジープに乗り込んだのは昼になってしまった。また今日も出発が超遅く、そして到着は大残業のパターンなのだ。

アスコレへのジープ道の後半は、私の知っているパキスタン山岳道路の中でも1級品の凄さだった。落っこちて当たり前のような崖に切り込んだ道をスイッチバックを繰り返したり、吊り橋を渡ったり、面白がっちゃう以外やりようのないルートだった。ジープは2台だったが、



私が乗っていた方の1台は、途中までもう1台を追い抜いたりして勇ましかったのだが、最後の登りの前でクラッチの具合が悪くなりストップしてしまった。シャーの判断で目的地まで、もういくらでもないのに、1台分は人力で運んでしまおうと言う事になり、暗い中で大騒ぎで梱包して各々順次、人間用の踏み跡に登って行く。私も登る訳なのだが自分のサブザックに入っているライトはほんの手元用の小さい物なので足元が良く見えない。それでも無理して5分ほども登っていると、突然身体のバランスが取れなくなり、すごく酔っ払ったように、全然立っていられなくなってしまった。自分でも何の事やらさっぱりわからないまま道から転げ落ちてしまい立つことも出来ない状態だった。飛んで来たシャーに助けられ登った2倍も時間をかけてやっとジープ道に戻ったが、全然歩けないので、健在のジープが荷をおろしてから迎えに来るまで近くにあった陸軍の建物の部屋に入れてもらって寒さ(そのときはとにかく寒く感じた)をしのいだ。

アスコーレにはずいぶん遅くなって着いたが何せフラフラだったので時間を忘れてしまった。

6月22日(6日目) ジョラ 3200mへ

昨夜は死んだようにクィックスリーピングしたので、朝まで1回も肩の痛み等で眼覚める事もなく、良い気分で起きる事が出来た。アスコーレからの道は、今までの山のように村はずれからいきなりの急登と言う事は無く、ピアホー河への廻り込む時の岩尾根までは、ひたすら長く坦々とした道だった。おかげで昨日までの毎日パニック続きの変な日々から自分の足で身体を運ぶ健康的に労れる日々への移行するアイドリングとしては丁度良かった。出合いの岩尾根を乗り越えてからピアホー河を1時間少々遡って吊り橋を対岸(左岸)に渡るが、かつて朝霧の西原、植田、山口、等のバインターブラック隊は、そのまま直進してピアホー氷河に入って行ったのだ。私は対岸を今度は30分少々下ってジョラのキャンプ地に着いた。

ジョラには他の隊も居て、何となく3~40人位の人々がざわめいている。もっともそのうち10人位は私の隊のポーター達だが、—— トイレもある。

シャーが携帯のメールで1週間ほど先行している日本の木村、長谷川隊のガイドと連絡がとれ、順調に行っているとこの事だった。この国の携帯も大したものだ。

6月23日(7日目) バトルムへ

本来なら今日はバイユまで足を延ばし、その翌日はバイユで滞在するスケジュールになっていたが、シャー言うには、バイユはあまり良くないので、今日は途中のバトルムまでとし、明日早くバイユ入りした方が良いという事なので、その通りにする事とした。ピアホー河とバルトロ河との合流附近に戻り、そこからピアホー氷河の奥にラトックのI峰II峰を見出す事が出来た。朝霧隊の頑張ったバインターブラックは、その奥にあるので残念ながら見る事は出来ない。いずれも7000mオーバーの高

峰で、いかにも鋭く立っている。またすぐ近く、バルトロ河の対岸には、6000mオーバーの鋭い岩峰が氷をまとって突っ立っている。名前はシャーから教わったのだが忘れてしまったが、いかにもカラコルムの前衛峰らしく岩と氷の山だった。

それらを眺めつつ平坦な道を進むと昼前後には林に囲まれたバトルムのキャンプ地に着いた。ランチを済ますと、軽い昼寝のつもりでキッチンテントでゴロンと横になったのがうっかり本寝となってしまう、ポーター達のランチを多めにジャマしてしまった。あやまりながら自分のテントにもぐり込みまたまた爆睡してしまい起きるとディナーだった。

6月24日(8日目) バイユ 3600mへ

今日も半日行程なので午後2時前に、おおむねコースタイム通りにバイユについたが、びっくりするほど人が多かった。私1人の為にでも10人のポーターが必要なのだ。後で聞いたはなしでは木村・長谷川隊は80人もポーターが必要だったの事なので、例えば登り下り各2チームがここに居ればもう200人以上の人が居て当然なのだ。計算すれば解ることもこの山の中でこの人数を見ると逃げ出したくなるのは私ばかりではあるまい。おまけにパキスタン人同志の話し方が騒がしい事。まるでニワトリのケンカだ。シャーがバイユじゃリラックス出来ないと言った意味が良く解った。昨日バトルム泊してくれたのはには感謝だ。私は今までのヒマラヤ行では、こんなメインストリートは初めてなのですっかりアキレてしまった。

6月25日(9日目) クブツェ 4000mへ

今日はいよいよ氷河に入る。ナジール事務所を出してくれたコース案内タイムがどうもはっきりしなくて、単純に時間を足すと11~12時間にもなりそうなのだが、そんな事はあるまいと思っていたが終わってみれば12時間かかってフラフラになってしまった。前半は主にバルトロ河の右岸の道を河原へ降りたり登ったりを延々と繰り返しながら氷河の末端の壁を目指した。やはり氷河の上に立たないと本格的な山に入った気がないので末端壁は励みになった。おまけに木



氷河末端壁付近

村・長谷川隊が近づいているらしく、シャーと先方のガイドのメールが通じた。出来ればこちらが氷河の上に達

してから会いたいものと、久方振りにハイな気分が末端壁をはい上がり運よく、岩稜がいくらか小広くなった所でかれらと出会う事が出来た。

9日振りに思いつくままに日本語でしゃべって良い相手に会い、しかもそれが古い山仲間となれば興奮するのは70歳のジイさんでも同じで、わずかな時間だったがすっかり舞い上がってしまった。「これから長いよー」の木村さんの言葉を最後に別れ、再び氷河上のモレーンにルートを登ったり下ったり、そしていよいよ迫力を増して迫るトランゴタワーなどの岩峰群をカメラにおさめながら登ったが、それからが長かった。木村さんの「長いよー」は今日の事だったのか？等とシャーと冗談を交わしていたが、それからが本当に長く何回それらしい台地に登ってもキャンプ地らしい物が見えず、何回もたまされた末、前方のモレーンの上のオレンジ色のテントを見つけた時は心底ホットして残りの水に粉ジュースを入れて「カンパイ」と一気飲みするほどだった。時計を見ると12時間もかかってしまったが、アスコレでひっくりかえった時のように病的なものではなかったので、同じくフラフラになっても陽気なものだった。

ディナーの時、今更だが今日が何日なのかシャーと確認する。シャーは指を折って、私は日記帳をめくって、「エビハラさん時計で読んでよ」とシャー。「どうせ見えないんだから合せていないよ」とフテクサレルと私、「シャーはガイドなのに時計を持っていないのか？」に対して「1年に3回位しかガイドの仕事が無いから」とフテクサレル我がガイド。それでも何とかスケジュールはくるい無く、国内航空のゴタゴタで1日詰まってしまうことを確認、コンコルディアでの自由行動の1日はないのだ。

6月26日(10日目) ウルドガス 4200mへ

朝、気がついたが、手の甲が大分腫れていて時計のバンドもきつくなっていた。高度4000m位でこうなったんだ。早々と高度の影響が出たのだ。腎臓あたりの機能が衰えてくるのは70年も使っていれば当たり前から異常でも何でも無い。さあ登ろう。

今日の道程はそう長いものではないがサイドから合流してくる谷のモレーンの登り下りではずいぶん体力を奪われるし、時々急斜面で顔を出す氷のすべる事すべる事うっかりすれば氷河湖へドボンとなりかねない。しかしここまで来ると、上方の山のロケーションは大したもの、8000mオーバーのブロードピーク、そして難峰GIVが全身とはいえないがキャッチ出来た。昼にはウルドガスに着いて、テントに入ったが、陽の当たっている間は恐ろしく暑く、身の置き場も無かった。夕方に雲が出て急に涼しくなり、それを通り越して寒く感じる程になった。

6月27日(11日目) ゴロ2 4500mへ

くもりがちを通り越して、雨がちになって来てしまい、午前午後を通じて3時間ほど冷たい雨に降られたりしたので、この日めぼしい写真はムスターグ・タワーもうんと近くを通過したのに頂上付近は雲の中にボンヤリといった具合だった。

そんな訳で、ただひたすら登っているんだか下っているんだか解らなくなるような数十mの凸凹を氷の斜面上がりながら乗り越え乗り越え、またまた11時間もかかって到着した。ここは昨夜のウルドガスの幕営地のようにはげつぷちではないので、小キジ位はヘッドラントで何とか出来そう。ただ大分冷えて来たので服装は準冬山仕様になりテントが雨漏れするのでシュラフカバーも使い、ビニール袋を動員しアレコレの防水を行い、いよいよ本格的になって来た。



ムスターグ・タワー (7284m)

6月28日(12日目) コンコルディア 4700mへ

スカルドまでのドタバタで日程が短くなってしまったので、今日が最後の登りとなっている。空はクライマックスをむかえるに全くふさわしくなく、降ったり止んだりの1日だった。時々低い雲に包まれ、何の色彩も無い眼の前の岩と氷に向かうのは、何とも陰惨な感じで、とても行程の最高到達点に向うのと言う楽しさを感じられるものではなかった。遠くを見通せる機会もないので、廻りの大きい山と自分の位置関係が解りづらく、結局自分



K2 (8611m) 2010年8月撮

の登ったルートが、帰宅後の写真でなぞる事が出来ないほどだった。

それでも昼を過ぎて数時間の頑張り、目の前の岩塔がなくなり、なんとなく自分が高い位置に上って来たなと感じて来た頃、小高いピークの上に白いドームの建っているのが見え、シャーが「軍隊の建物です」と教えてくれたので、これがパキスタン軍の最高点の駐屯地であり、私はコンコルディアの一角に登りついた事が解った。シャーが建物に入り、多分登って来た事を報告したのだろうが、軍人が出て来て私と面接する。流石に最前線の兵だ。身体も顔も絞まって仲々ハンサムだ。まあ私の息子と言うより孫に近い年齢なのだが、かなりのびっくり眼で、「かなりお年ようですが、いくつですか？」と聞いて来た。

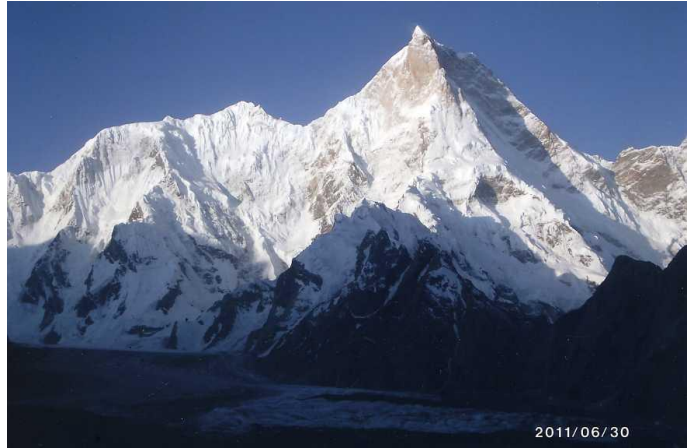
バイユ以来ヒゲを剃っていないし、多分顔もむくんでいと思うので、老けてみえるんだろうなと思う。「70才」と答えると、ぶっとんでティーを運んで来るし、建物から5~6人もの兵士が飛び出して来て肩をもむやはれた手の甲をマッサージするやら、日本では絶対だれもやってくれっこない大サービスをしてくれた。1週間ほど前に通った木村・長谷川隊の中にも私と同じような年齢の人も居たのに彼等はどうか若いふりをしたのか、若いころのキセルの癖で、ついシークレットスルーをしたのだろう。どっちにしてもそこでやや良い気分になり、それから30分程奥にあるキャンプに入った。でも天気は相変わらずで、いつでも上方は雲がべったりで、一昨日まであんなに見えていたブロードピークは裾の方だけ、K2はほとんど何も見えない。えーついてねーな。テントの向きを変えて寝転ろがってもK2方向がみえるようにして、暗くなるまでねばり抜いたが、ついにその姿を見る事は出来なかった。

6月29日(13日目) ゴレ1へ 下り

ポーターは先に出てもらい、私とシャーはそれから2時間K2の姿を見たくて待ったがとうとうダメで、あきらめて下りにかかった。今日はゴレ1まで足を延ばすので早出をしたかったのに逆に遅出したので急がないとゴル1に着する前に暗くなってしまう。このだだっ広い氷河の中で暗くなるのはかなりヤバイ事になるので、昨日歓迎してくれた兵士達へは声をかけ、手を振るのみで見る事の出来なかったK2共々振り返りながらコンコルディアの肩から下りにかかった。

今日も降ったり止んだりのモノクロの世界だ。少々ヤケクソ気味に足を速めたが、やはり道中は長かった。夕方4時頃になるとあたりは大分暗くなり、雨も風も止む事もなく行動食もロクなものも残っていないし、とうとう日本に居るときから緊急用の1袋だけ財布に入れて持ち歩いていたブドウ糖まで口に放り込む始末だった。こんなになるほど犠牲を払ったのに、昨日も今日もK2の姿は見る事が出来なかった。それから4日間は、ほぼ登りの道中と変りの無いものだったが、やはり下りとなると

ゆとりと油断のせいで、登りの時はしっかりと見る事が出来なかったピアホー河とバルトロ河の合流点の風景、そのはるか下流でのスカルドの近くでのインダス河との合流の風景等に感激しつつ記憶することが出来たり、バイユに下った日、馬が通る広い踏みあと道から石につまづいて3~4mも転げ落ち、またまた財布にたった1枚入れておいたバンドエイドのお世話になったりしたものだった。



マッシュブルム(7821m)

7月5日(19日目) イスラマバードへ

帰路の国内便は運よく飛んだが、シャーのチケットは相変わらずゲット出来ない。彼はもうイスラマバードへは行かないと言う事なので、1人で機に乗ることとした。もう何か有ってもここからの機の行き先はイスラマバードだけなので、乗り違いが起きるはずは無いし、たとへ飛ばなくても、ナジール事務所のスカルド営業所の位置も、ホテルもしっかりと頭に入っているので、迷子になる心配もないので、アッサリと別れた。

イスラマバードではナジール事務所のマネージャーのスターンさんと、シャーの変りのガイドの出迎えを受け、その日の夕方には、先に下山し1週間程をフンザで過ごした木村・長谷川隊とに合流し、日本へ帰る便の時間待ちの1日半は、彼等の見学旅行にくっついてすごしたのだった。

海老原 道夫